

シベリアの空の下は寒かった

愛知県 小沼 勇

(旧姓 加藤)

昭和二十(一九四五)年八月二十六日、満州東寧の勝鬃山で最後の決戦をする準備をしていたところ、終戦になったと報告を受けて、武装解除され金倉収容所で一カ月ほど生活していた。木も草も無い所の生活は、ただ食べるということによって国に帰ることを願っていた。

初年兵は食事当番をしていたが、毎日が塩スープのみだったので逃亡する者もあったが、ほとんど射殺されたようで機銃掃射の音が絶えなかった。今度の戦闘が終わった後でも何人かの戦友が出て行った姿は、今でも脳裏に焼きついて忘れることはできない。

十月に入ってから「東京ダモイ」の貨物列車に乗ったが、北へ行くか南に行くか分からなかった。

数日して駅に列車が停車したとき、扉の間隙からホームの名が見えて驚いた。ロシア語だ。皆に知らせると、ダモイ列車じゃない、シベリア行きだと嘆きの声があちらこちらで聞こえた。いよいよ覚悟をしなければという声になった。もう内地の土を踏むこともできず、親・兄弟・親戚・妻や子にも別れを告げなければならなくなったと、涙ぐむ戦友。

十月十日、ハバロフスク地区の第九収容所へ五百人単位で入れられた。

食糧も無く、衣服も夏の軍服で日中はともかく、陽が落ちると気温が零度以下になるので、寒くてストーブを焚いたが、薪が湿っていて煙ばかりで、舎内にいたたまれず外に出たところで、馬が一匹倒れたというのを聞いて、その馬の肉を生で、ハイエナが死んだ動物を食い千切るように、よってたかって短時間でむさぼり食った。残ったのは骨とひづめのみ。久しぶりの肉食だった。

次の日から伐採作業に出た。これが達成できない

いと兵隊だけではなく将校たちも食糧を減らされるので、叱咤されながら作業をし、兵隊たちは栄養失調になり死んでゆく者も出るほどだった。それほどに兵隊たちは牛馬のような労働を強いられた。

ある日、都会への労働の募集があつて第五収容所へと変わった。

ここも五百人くらいで、ドイツ人もいた。労働はいろいろあつたが、食事は変わらなかった。衛生という面では、女医がいて定期健診があつた。入浴はなく五月から十月初めまで河での水浴をした。

初めての仕事は、民家の便所のくみ取り作業。零下三〇度以上の寒さで大便秘凍っているから、鉄棒で壊して手で掬って容器にいれて河に捨てる。しかし河は凍っているので野原に穴を掘って埋めるのですが、ツルハシで掘ったらツルハシが壊れてしまった。鉄棒では氷の硬さで弾むだけ。火を焚いて氷を溶かして掘る。これが十センチほどし

か掘れないので、またそこに火を移して掘る。一日中かかって、やっと一メートルくらいしか掘れない。極端に言えば腹が空いて、新聞紙がキャベツに見えてきたり、馬糞が馬鈴薯に見えるようになってしまふ状態になる。ああこれが栄養失調かと思うようなことが多々ありました。伝染病こそ出なかつたが、こんなことが続けば死んでしまふと思つておりました。

昭和二十一年の四月ごろから食糧も大分良くなりました。そのころのこと、貨車で運搬されてきた食糧を倉庫まで入れる作業がありました。いろいろの野菜が入った袋があり、その袋を担いで倉庫に入れる間に袋を少し破り、中の野菜を口に入れていたが中にニンジンがあり、そのニンジンを口に入れたときに、このニンジンのおいしさには吃驚しました。今まで食べたことの無い果物を食べたような味でした。しかし、私は小さいころよりニンジン嫌いでした。食べたことが無かつたから、そのとき口の中へ入れたが、幾ら空腹でも噛んで

飲み込むことはできなかつた。この悔しさに涙を流して泣きました（復員後食べられるようになりまし）。このことは今でも忘れることのできない一つです。

バアロン工場の作業に出たが、ここでは木工、鋳物、石炭降ろなどしました。なおこの工場は軍需工場で戦車用のものを作っており、囚人も沢山働いており、我々を友達のように話しかけてくる者もあり楽しく仕事ができました。彼らには死刑という刑罰はなく、刺青で刑罰が分かり何十年と囚われておるものもいたが、一番重い罪は食糧泥棒という話でしたが、このことは我々抑留者も同じだと聞かされました。

都会と原野で働く我々抑留者の作業には、軽重のあることが分かりました。原野と山に近い第九収容所の作業は伐採や開墾などであり、伐採もキツイ仕事であり、開墾は広大なツンドラ地帯で、ツンドラを斧で取り除かなければならぬ。ノルマは無いが、取っても、取ってもキリがない。腹は

空いてめまいはするで、歳取った補充兵の人たちはここでも祖国の土を踏むことのできなかつた者も出たほどであった。

約二年間いた第五収容所はシベリア地区でのユダヤ人の町と言われるところだけあって、労働の種類も多かつた。前記の民家の雑役や工場の作業やコルホーズ、ソホーズでの仕事。道路修理、電柱運びなど少人数の作業が多く、私は転々と職場が代わったので月日のたつのも早く感じました。

食糧事情も良くなりましたが、共産主義への教育が盛んに行われるようになり、特に通訳関係者や特務機関、憲兵などは烈しい吊るし上げに遭い、自殺者も出るほどだった。

私も満鉄職員であつたため、半日ほど徹底的にしごきを受けました。

このころに、ダモイの話が言われるようになり、早く教育を受けた者は早く帰国することができるとの話も伝わってきました。けれども私のような若い者は、次から次へと仕事に追いまくられ風退

治の時間も無いほどで、共産主義の勉強どころではなかった。

そんなわけで、若い私達は町の人たちとの交流とか、収容所内の風紀の改善などが労働の上に重なって来ました。これは結果的に良かった。町の中を自由に歩くことができ、広場では三ルーブル払えば町の人たちとロシヤダンスを楽しむこともでき、五ルーブルで座席指定の映画を見ることができた。商店の買い物もできたが品物は僅かでした。

この半年前までは、五寸釘を折り曲げて畳み糸で縛り、河で鱒や鮭を釣ってきて皆で生で食ったり、野原でヤマゴボウを掘って食べ、女の軍医に、草の根を食っては駄目だと叱られた思い出があります。パン工場の作業ではパンが食べられると競って志願しました。しかしパンは食えなかったがパン粉の入った袋を運ぶとき、袋を破ってパン粉は食えた。

ソビエト人の一般の生活費は当時四百ルーブル

だったから、私達抑留者がノルマを達成した場合には国民生活費以内で支払っても良いというものだ。二百ルーブルほど支給を受けることが出来た。収容所内で週一回の休日では使いきれない金であった。これ以前の生活で考えられないほど天国と地獄ほどの差がありました。

コルホーズへ作業に行ったとき、馬鈴薯小屋の雨や雪よけに畳が使われていたのに驚いた。また軍用用の携帯味噌、醬油などが山積みされているのを見たとき、ソ連は満州にある日本の物資のあらゆるものを根こそぎシベリアに持ち込んだ貪欲さに呆れると同時に、憤りを感じた。コルホーズの仕事は馬鈴薯の植え付けで一週間ほどさせられた。食事は馬鈴薯の生ばかりで夢にまで見るほどだった。ある時など夢の中で馬鈴薯のお化けに追いまくられて目を覚まし、外へ出て夜空を見上げたときビー玉ほどの大きな星が五つ六つと輝いているのを見た。その中で北斗七星の輝きは大きかった。この空は内地まで続いていて親たちも眺め

ているだろうかと思ひ、いつまでもいつまでも眺めてゐる頬には涙が流れてゐた。

昭和二十二年夏。第七収容所の者たちは帰国して、残された私達数人の者が後始末をしてその後、二十八キロ地点の収容所に移った。ここは第九収容所のように伐採ではなく、四人一組で丸太を組んで筏にし、約三十キロ下流の町まで河を利用して運ぶ仕事だ。流れに身を任せて町に着くまで釣りをしたり、舵取りしたりで楽しい仕事だった。寒くなると伐採に戻されてしまいました。帰国した戦友たちのことを思ひ、なんとしても帰国するんだと、伐採をするのは赤松ばかりにして、ノルマは無視して作業をしたのです。理由は赤松の松笠は赤ん坊の頭ほどあり、その内には落花生ほどの実が沢山あります。これをコップ一杯分で二キロのパンと交換できるからです。その他にドンダリや柏の実など食べ物に不足は無かった。外套は羊の皮のシューバー。靴は羊の皮のカートンキーが支給された。

春も近くなった四月、共に夢に何回となく見た帰国の知らせを受けて、皆と真っ黒になっている顔に涙を流して喜び合ひ、冷たかったが震えながら河の中でフンドシをタオル代わりにして体を洗いました。ナホトカの港に着いたとき、手桶一杯の湯で全身を洗ったのが、抑留中始めての終わりだった。ナホトカには四月末ごろ到着したが、各地から帰国する戦友たちが二万人も船待ちしていた。船の来るのは不定期で、一船に乗船できるのは二千人くらいと聞く。一週間で乗れるのか、一カ月かかるのか分からない有様。その上、奥地より帰国列車が次々と到着する。それにこの飲み水は鉄分が多くて飲めないので遠くから運んでくるといふこともあり、そこで我々若い兵隊は、話し合った。

病人や年老いた友を一日でも早く帰国させようと。そしてオールシオルという町で再度作業をしながら待つという者を募った。一日も早く帰りたいと誰もが思っているにも拘わらず大勢が集まっ

てくれた。そこで、私達は条件として年末の最終便までには必ず我々が乗船できることをソ連に承知させた。

私達体の健康な若者数百人は列車でオールシオルの町に着いた。ここでは三日遅れの日本新聞を見る事ができた。食事もあるパンと塩魚の一日二食。作業内容はいろいろで、私は病院の建設作業にまわる。年内に完成させよというものであったが、年内には帰国できるという大きな希望に燃えて、一生懸命働きました。

十月に半年の作業で病院も完成し、帰国の途につくことができました。このころにはナホトカの帰国待機者も少なくなっていました。

ここで、ナホトカにおる間に聞いた大事件で、その犯人の将校が東京で裁判を受けるために、このナホトカで乗船待機しているということです。その事件を書いておきます。

それは一人の将校が自分だけ生き残るために、多くの体の弱い体力の無い兵隊をノルマが不足し

ているからと言って、食事を与えることなく素っ裸で縛り上げ、酷寒零下四〇度近くの寒空の下に曝して死に至らしめたという事件でした。

いよいよ帰国となると苦しかったこと、辛かったことが走馬灯のように頭の中に浮かんできました。昭和二十三年十月二十六日、遠州丸の帰国船に乗船して日本海の荒波を乗り越え二十九日舞鶴港へ上陸しました。

ツンドラでの作業のときマラリアに罹りました。それが帰国してから冬の寒いころになると高熱がでて苦しみ、六十歳になるころまで続きました。

十九歳で兵士となり、十七日間のソ連との激戦。それに続いて地獄のシベリア抑留生活三年間が、私にとっては、私の人生のすべてと言っていいほどで、今日こうして生きていることが不思議に思うほどです。

【執筆者の紹介】

現住所

愛知県春日井市前並町

旧住所 名古屋市瑞穂区直来町
最終学歴 大連満鉄育成学校
入 隊 昭和二十年五月二十一日 満州東
寧（部隊名失念）

軍 歴 歩兵（終戦時）陸軍一等兵

終戦場所 東寧 勝鬨山

復員後の経歴 昭和二十四年一月 運輸会社入社

昭和二十四年六月 退社

昭和二十四年七月 名古屋市交通

局入局

昭和五十七年一月 名古屋市協力

入会

平成三年六月 退会

（愛知県 河村 廣康）

シベリア追想記

愛知県 高木 勝 巳

（旧姓 山下）

昭和二十（一九四五）年の終戦を奉天（瀋陽）
でむかえ、武装解除後の九月十八日客車に乗せら
れ新京（長春）・ハルビン・黒河・ブラゴエシチ
エンスクを経由して、十月の末カザフスタン・サ
マルカンドに到着しました。

収容所名は失念しましたが千五百人の長は山口
少佐だった。湖の対岸にある収容所に、囚人と入
れ替わって入所。私は三カ所の収容所を変わりま
したから、サマルカンド第一・第二、カラカンダ
第一として話を進めます。一舎屋に二、三百人。
真ん中は通路で二段ベッドになっていたが、囚人
の置き土産で南京虫と虱に夜も眠れず悩まされた。
血肉を分けた兄弟ということか。

十一月初めごろから毎晩点呼があり、人数を数